四旬節第四主日

2021 年 3 月 13 日

菊地功大司教　メッセージ

「独り子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」

ファリサイ派の議員であり、指導者でもあったニコデモとイエスとの対話を、ヨハネ福音は描いています。そこでは永遠の命を得るために必要なことはイエスを信じることであって、救いは神からの恵みとして与えられることが強調されています。

パウロはエフェソの教会への手紙で、「あなた方が救われたのは恵みによる」と記して、わたしたちの救いは、自ら創造されたいのちを愛してやまない神からの、一方的な恵みによっていることを明確にします。

ヨハネは「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」と記し、その独り子が、信じる者皆の救いのために「上げられねばならない」と語るイエスの言葉を記して、十字架上でのイエスの受難と死が、神の愛に基づく徹底的な自己譲与の業であることを明確にします。同時にそれは、十字架が神のあふれんばかりの愛の、目に見える証しであること、しかも具体的な行いによる愛のあかしであることを明らかにしています。さらに、神の愛は、裁きではなく救いをもたらすことも明示されています。

神は愛する民を闇の中の苦しみに放置することなく、光へと導こうとされます。それは神が自ら創造されたいのちを愛してやまないからであり、神はなんとしてでもすべてのいのちを救いへと招き入れようと、手を尽くされています。

神の豊かな愛に包まれて救いへと導かれているのですから、神を信じるわたしたちは、その愛を、ひとりでも多くの人へと伝え、ひとりでも多くの人がその愛に包まれて、光を見いだして生きることが出来るように、愛の実践を通じたあかしの業に務めなくてはなりません。

そもそもわたしたちは、自分の性格が優しいからとか、そういった個人的な理由で愛の業に励むのではありません。わたしたちは、神の愛に包まれて生かされているからこそ、その恵みとして与えられている愛を実践することで、ひとりでも多くの人にあかしをしたいのです。愛に包まれていることを感じるとき、わたしたちは理念としてではなく実感として人類愛を語ることが出来ます。教皇フランシスコは、今年の四旬節メッセージに、多様な社会の中で共通して愛を語るために、人類愛から始めることの重要性に触れ、次のように記しています。

「人類愛から始めるなら、だれもがそこに招かれていると感じられる、愛の文明に向けて進むことができます。愛は、そのすべてに及ぶダイナミズムをもって、新しい世界を築くことができます。愛とは、何も生み出さない感情ではなく、すべての人にとって有効な発展の道を得る最高の方法だからです」(『Fratelli tutti』183)。

3 月 11 日で、東日本大震災が発生して 10 年となりました。あらためて亡くなられた多くの方々の永遠の安息を祈ります。日本の教会はこの 10 年、まさしくわたしたちを包み込む神の愛のあかしとして、東北の被災地で復興支援活動に携わってきました。10 年の節目に、教会全体としての活動は終わりを迎えますが、当然、東北各地には教会共同体があり、この 10 年の活動の実りも残されています。これからも、仙台教区の教会共同体と共に、東北各地の皆様と歩みを共にしながら、ひとりでも多くの人が、神の愛に包まれていることを実感できるよう、努めていきたいと思います。

多くの人が、希望と愛を必要としています。闇に輝く光を必要としています。